

文化高知

寺田寅彦博士にひかれて

山岡亮一

寺田寅彦という偉大な自然科学者の存在が、高知に移り住んで、ぐっと身近にせまってきた。

わたしが中学生のころ、夏目漱石の『吾輩は猫である』や『草枕』『坊っちゃん』などを父から読んでもらい、また自分でポツポツ読みはじめていて、今でもその文章の一部を覚えているのが不思議なほどである。

『吾輩は猫である』の中に登場する主人公の弟子にあたる水島寒月という人物が寺田寅彦をモデルとしていて、東大の物理学のえらい先生だとも書いて、俳味をおびた、飄々として物にこだわらず、しかも人の意表をつく鋭さのある人物に、子供ながらひかれるところがあつたのを忘れていない。しかしそのころは寺田寅彦が高知の人であるという認識はなかったように思う。高等学校、大学、大学院と進むにつれて、専門は社会科学に属するが、経済学の古典などを読み疲れた時、岩波文庫の寅彦随筆集をひもといて頭のレクリエーションをこころみることが多かった。『冬彦集』『万華鏡』『柿の種』などであった。日本の自然科学者の随筆の中で最も日本の感覚をそなえていて、わたし自身社会科学の中で自然に

最も近い農業経済論に打ち込んでいた関係もあり、深い関心をもって読んだし、またそこから大いに啓発されることしばしばであった。

その後、京大で農業経済論の講義をすることに、よく農村の人たちに



カット 筒井広道

講演を頼まれて話す折、ふと口をついて出た文句に寅彦随筆集の「都市にばかり住んでいては農村、農業のことがわからぬと同様に、農村にばかり暮らしては農村、農業のことはわからな

い」といったことがあつたのをおぼえている。

縁あつて、高知に移り住み、桜馬場の宿舎におちついて、高知の自然、人間に生で接してみると、急に寺田寅彦の存在が身近にせまる思いがしてきたものである。宿舎から五分もかからぬ目と鼻の先に寅彦の幼年時代を暮らした邸宅跡があり、門前には寺田博士二流の警句、「天災は忘れられたる頃来る」ときざまれた碑がたてられていて、散歩の度にいつもその前を通った。

このように寺田寅彦に親近感をまよしてきた今日、全集第十巻におさめられた「日本人の自然観」をよむと、博士が幼少年時代高知に住み、高知の自然と人間に接して生活されたことが、その学問にどのくらいに大きく影響しているかが推察される。

高知は日本の濃縮された姿とどめていてよくいわれている。日本で育つた「自然科学」の先駆者である寺田寅彦博士をしのび、美しい自然を情け容赦なく破壊して行く日本の現状を見ると、自然と人間の全体的関係(寅彦のことば)について、再び深い反省を求められていることを痛感している。

なお寺田寅彦邸宅復元の事業がとりあげられたことを心から喜ぶと共に、その美事な落成を心まちしています。

(高知市文化振興事業団理事長)
元 高知大学学長

先祖返り試論

山田 一郎

「浦戸湾は紀貫之の時代から長宗我部、山内家の治政時代を経て、明治・大正・昭和に至るまで、土佐に對する文化の導入路として歴史的な役割を背負ってきた。こんにち、土佐を象徴する歴史的、文化的遺産のほとんどは、浦戸湾という風土とその周辺に集中していることが、よくそれを物語っている」

初めにお断わりしておかなければならないが、この文章は雑誌『南風』(32号、昭和四十一年五月)に私が書いた「浦戸湾の美学」という小文のなかの一節である。さらにお断わりしなければならぬが、私は「浦戸湾十三夜」(昭和五十六年九月十四日)、『南風帖』(高知新聞)という文章でも、この一節を再度引用していることである。何という能のなさであろうか。私はいま三度、同じ文章をここに記して浦戸湾——すなわち高知の歴史と文化と風土について語りたいと思うのである。

ここに記した「浦戸湾」とは、高知市そのものであると読み替えてほ

しい。古浦戸湾の中枢部にいまの高知市はその行政地域を占めているからである。

慶長六年、山内一豊は大高坂山に居城を築くことをきめた。大高坂松王丸、長宗我部元親もかつてこの地に據ったことがあるが、遠州掛川で十年、築城と市街経営の経験を積んできた一豊は、大高坂と国沢が要害の地として優れている上に、特に美しい風光に恵まれていることに大きな魅力を感じたのではないか。城下町はどこも佳景の地に営まれているが、山内一豊の審美眼は以後三百年、美しい景観を土佐びとに供することになった。それは一つの文化であり、伝統の始まりでもあった。

この文化と伝統を受け継ぎ、後世に伝えて行くことは高知市民の文化作業であるべきであった。明治維新という大きな改革、南海大地震と高知空襲という災害を受けた高知市はもろろん苦難の中から近代都市として再生して行ったが、残念なことに天与の優れた景観は開発と新生のスローガンの名のもとに、悲しいほどに損壊を受けた。私が「浦戸湾の美学」という小文を書いて、高知の美の伝統が失われて行くのを歎いたのは、そういう時代のことであった。

昔、高知は水郷と呼ばれていた。吉村淑甫氏と数年前にそういう会話

を交わしたことがある。その時、私の心の中には田中真太郎の書いた『土佐山海経』の文章があった。吉村氏も多分、そうではなかっただろうかその一節を引いてみよう。

「高知市は水郷である。浦戸湾の入江の裾になっていて、町の南を水の澄み切った鏡川が流れ、町の北には真菰の生えた大きな川溝(注、江の口川)があり、町の中にも入江から続いた堀割の水が本町の裾にまで通じている。その堀割には、石油発動の巡航船が見え出してから、今はその数もめっきり減ったが、それまでは堀割を中心にして、ゴンドラにまがう屋形船が往来していた。(略)」田中真太郎は鏡川と堀割の口になった州の上の青楼や、その州の続くところ、満潮時には隠れる芦荻の生える沮洳地があつて、晩秋初冬には漢詩にあるような景趣が見られることを書いてある。夏の夕暮れの五台山、その麓へ架かる青柳橋、月の夜夢のように鏡川に浮く筆山の風景などを描き、漢訳して孕門という内海を屋形船で桂浜へ行く話などを書いている。貢太郎が『土佐山海経』を書いたのは、大正九年のことである。しかし、いま高知を水郷の町と思う人はいないだろう。

——高知市文化振興事業団が設立されたことを聞いて、私はまず失

れた高知市の美しい景観のことが思い出された。そして、五台山の吸江寺を訪ねた時、老住職が弘化台の埋め立てで吸江十景が全く失われたことを淡々と語り、西武の堤義明さんなら風致地区の保存に努めたでしょうと述べたのを思い出した。また、鏡川、江の口川の汚染を思うと、東条猛猪拓銀相談役から聞いた札幌の豊平川に鮭が帰って来るまでの市民運動の熱心さを思い起こした。

高知に坂本龍馬、自由民権記念館が建つことを想像するのは楽しい。しかし、その可能性を思うと私はペシミスティックになる。それで、地図を広げて壮大なイメージを描くことがある。「県庁と市役所が並ぶ柳かな」(寺田寅彦)。二つの役所が狭い敷地に並ぶことはない。高知市役所は一宮、布師田、大津、介良、さらに南国市岡豊方面へ出て行くことだ。香長平野は土佐のまほろばではないか。そこに新しい庁舎を建て、高知新市を造成する。新高知駅も作ればいい。美術館もマンガ記念館も造る。近代都市の建設だ。

一豊以来の高知から、紀貫之、長宗我部元親の故地へ先祖返りする。高知市文化振興事業団はそこまで踏み込んで議論してもいいのではないか。

(高知新聞社客員)

方言文化

英保 伶一郎

土佐弁に『イラレ』というのがある。『焦(イ)ラレル』から来ていると思うが、せっかち、慌て者、短気などと言ひ換えてもしくくりこない。あの語感からいつも連想するのは『煎(イ)ラレ』だ。豆がほうろくで煎られ、熱さにたまらず、パチパチはじけながら、なべの底を転げ回っている——そんな土佐人の、ただごとならぬせつかちぶりが思い描かれてくるのである。

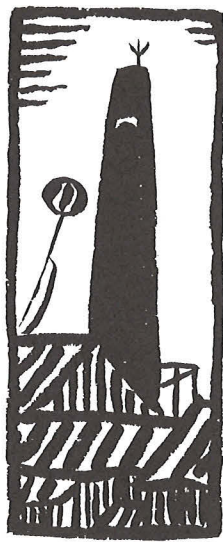
土地の言葉の後ろには、その土地柄があり、人間があり、生活がある。土佐のせっかちは、やはり『イラレ』と表現しなければならぬだけの特異な「個性」を持っている。方言は自己表現であり、おおげさないうと、その土地の国語、アイデンティティーに通じるものなのかもしれぬ。

知人の奥さんで東北生まれ、大学は北海道で、縁あって中村市出身の男性と結ばれ、十年近く高知市に住みついている女性がいます。アクセン

と違うが、一つ一つの単語、言い回しにはひよいひよいと土佐の言葉がまじる。土佐弁の選り食い、つまみ食いだ。彼女がつまみ食いだのを見ると、なるほど便利で、ほかに言い換える利かぬものが多い。『ノーが悪い』など、特に彼女が愛用する言葉である。

長い間の風雪に耐え、鍛えられ、練り上げられてきた土地の言葉が次に消えてゆく。言葉が表現する実体がなくなつて消えてゆくのもあれば、共通語に侵略され、亡ぼされてゆく言葉もある。いま、方言は激しい淘汰(とうた)の波に洗われているようだ。地方文化と中央文化が、言葉の世界でも競合していると言っている。

高知市文化振興事業団が方言辞典の発行を検討しているという。時宜を得た試みであろう。方言を通して土佐の人間、風土、歴史を描き出し、文化の一面を浮き彫りにし、方言への愛着を深めるような辞典となることを……。 (高知新聞社説委員長)



カット 片木太郎

連動して

より大輪の花に

西岡 寿美子

人は、それぞれの生涯を、ただ生き通すことさえもむずかしい。誰しも生存の谷間で苦闘している。文化など、空の空なることと思いがちだが、人間生活でかわる場の、すべてが文化だと考えたなら、これくらい切実なものはない。

その多くは、実用に供される文化だが、無用の用とでもいべき思想や情念を、かたちや、ことばに置きかえる、今ひとつの文化がある。

わたしの周辺でも、絵画、演劇、音楽、陶芸、彫塑、文学、染めや織りや、人形づくりや、あらゆる分野で、黙々と精進しているたくさんの、すぐれた仲間がいる。徒勞といわれ、偏執と笑われ、物心両面で家族にも犠牲を強いながら、これらの人々は

終りのない汗を流しつづける。高知市民三十万余の中には、更に多くのこうした仲間がいるだろう。地域や職場での、この人たちの地道な営みが、市の文化水準を底上げしていることはたしかだ。

ただ、いくら無償の行為とはいえ、それなりの評価は受けない。しかし、そのための「場」がいかに不足なくないし、今だに「東京へ出なければ」成り難い部分もないではない。人も作品も、ある意味で純粹培養を迫られ、ごった煮の中から噴くような異能、異才は許容されにくい。

かつては辺土といわれた北海道や東北が、ひとつの強力な文化圏をつくり、そのパワーが国内を席捲しはじめている。これだけ距離感覚が詰まり、情報網が密になった今日、居住地による負の面をあげつらうのは智恵のない話だ。負という負を正にかえ、頭脳流出を惜しんで、いずれ見事に咲く花なら、ここで、高知で、土着のまま咲かせたい。

すでに、大きく突出している分野もある。すぐれた仲間の、すぐれたしごと、次々と光がこないということがあろうか。連動して、より大輪となる高知の文化の花を、わたしも熱いこころで見つめていたい。

(詩人)

地域文化のたしかさを求めて

広谷 喜十郎

■地域の歴史から 学びとるもの

最近、高知県農業協同組合中央会の依頼をうけて、地域のなかの小文化にみられる伝統文化のたしかさを求めて少しばかりのレポートを書いてみた。近頃は「地域主義」とか「地方文化」という言葉が流行語のようにちまたにあふれている。日本経済が低成長時代に入り、中央の時代が行き詰まりをみせている昨今、手のひらを返すように地方の時代と言われるようになったのであり、中央の時代の行き詰まりを尻ぬぐいをするためのかけ声だとすると素直に喜べないのである。筆者にしても「地域文化のあり方」について全くの白紙状態で、模範的な解答をなにも用意してないが、いままでなには地域の住民たちが、いままでなにをしてきたか、これからのなをすべきかということを一一人が声を大にして主張すべき時期だと思ふ。そして、

あらためて地方の時代といわれなくても、地域の歴史をひもとくと、いくらか苛酷時代であっても、じつとがまんをしながら地域開発のための努力を積み重ねてきた歴史をもち、やがて歴史の主流を支える大きな力となって発展させた歴史を共有している。その地域の歴史を学ぶことなしに文化は育たないと思うので、私なりに若干の掘りおこしを試してみたわけである。今後機会あるごとに、小さな伝統文化を求めての旅を続けたいと思っている。高知市内でも伝統文化のたしかさを求めて、いろいろな動きがみられるので、いくつかの事例を紹介しておきたい。

■農協広報から見た 地域づくり

高知市鴨田農業協同組合が広報紙「かも農協だより」を刊行しているが、地域に密着した季節感あふれるニュースを盛り込んだ親しめる広

報紙づくりをめざしている。第二十六号では婦人部の女性たちが汗を流して工石山へ登山したことを伝え、昭和五十七年十一月には婦人部の十六名が鴻の森への「歩こう会」をおこない、翌年の十一月には七ツ湖への「歩こう会」を実施している。第三十三号では「鷲尾山と吉野の溪流はオラが宝、二十数年美しい汗を流す吉野地区民」という記事を掲載しており、「住民多数参加により一日大いに汗を流すことにより自治意識を高め、相互の融和を計る」と述べているように、登山道を整備することにより地区民の親睦と、ふるさと意識を高めているようである。地域のシンボルとして、鷲尾山と吉野川が地区のなかで生き続けているわけである。それに、三所神社や厳島神社（弁天様）などの祭りを紹介しているが、祭りの呼び物である踊りをする場合の最大なやみが後継者である踊り子がいるかどうかの問題である。第二十三号に「郷土芸能棒打復活」と題した郡頭神社の棒打保存会を紹介した記事のなかに、子どもたちの棒打ち姿が見られ心強く思われた。

注目される連載記事としては甲藤勇氏の「鴨田史話」があり、毎回かなりのスペースをさいて掲載されており、「大倉鷲夫」、「雁切川」、「神

昭和五十二年十二月に「朝倉の歴史を記録する会」が発足している。また、宮地俵吉氏は農協の事務所の一室に、できれば「郷土文庫」を設けて郷土に関する文献や資料を集めておきたいとも言っている。昭和五十八年三月に『木の丸の里―朝倉宮の前・奥・唾内町内会史』という小冊子が刊行されているが、これは地区の歴史や年中行事などを掘りおこし、後代に伝えるための証しとしたという趣旨からまとめたものである。旧朝倉村の人々の朝倉の歴史をまとめたという強い願望が、農協の全面的な協力を得て会合がおこなわれており、これが刺激となり、ふるさとに対する認識が高まりつつあり、やがてこれが結実することであろう。町内会史にみられるように、地域に新しく居住した人々もこうした運動に参加するにちがいない。宮地俵吉氏から聞くところによると、高知大学の歴史学専攻生とも交流の場をもっているそうである。広報紙三十七号で、山脇茂美氏は「村役場がなくなつて久しい年月がたち、行政機構もまた変つてしまった現在、旧朝倉村地区民のふる里ごころの拠点は、もはや農協しかないことを私共はよく知っています」と、農協が地域文化の拠点になるべきだと提言してい

■地域文化を支える 史談会の動向など

いま、高知県下では各地に数多くの史談会が生まれ、種々の活動がおこなわれている。このなかから多くの手づくりの地域史や個人史をまとめた本が刊行されるようになった。これらの本は地域に根づき、地方の匂いを生々しく伝えていっているものなので教えられることが多い。それに、さまざまな人生体験を積み重ねた人々に、それぞれ自分の歩んで来た歴史をまとめていただくことは、生きた地域史を物語る資料になるし、そこから先人の知恵を汲み取ることができる。このような本が刊行されたならば、行政機関が買い上げて図書館などに配布すべきである。県下各地には語り部的な人々が沢山いるわけであるが、残念ながら、このような文化を支えてきた人は、ほとんど世の中に紹介されずに、場合によっては地域の片隅に追いつまされてしまっている。知的生産にも大きな価値のあることを認識して、文化振興事業団あたりで大いに紹介していくべきであろう。そうすれば老人たちの生きがいにもつながる筈である。

昭和五十九年一月二十一日に、高知市秦泉寺地区に住む郷土史家が集

社誌」など地域に関係した史跡や人物を取り上げて書いておられる。「史跡めぐり」の記事では地区内に散在している数多くの史跡をこまかく紹介しているので、散歩しながら地区の歴史探訪を試みたい気持ちになる。ふだんなにげなく歩いている道端にも沢山の史跡があり、これらを知るとあらためてふるさとへの歴史の重みを感じるであろう。この広報紙に神田小学校の体験学習での稲刈り行事を紹介しているように、地域の学校教育の場にもふるさと学習を積極的に取り入れていく必要があると思われる。

高知市朝倉農業協同組合の広報紙である「農協あさくら」は、八ページという限定されたページ数のなかで、見出しに工夫をこらし、写真やイラストを多く活用し、コラム記事にまで読ませる配慮をしている。それに、老人の働いている姿にも目を向け、若妻会や婦人部の活動に関する記事も多い。この広報紙でも「朝倉の歴史シリーズ」や「方言・民話」が連載され、朝倉地区の歴史や楽しい昔話が数多く収録されているわけであるが、この地域に郷土史家や語り部（べ）が多く居住していて朝倉農協を支えていることによる。そして、朝倉農協が全面的に協力して朝倉の歴史をまとめようとの動きがあり、

まり、秦史談会が結成された。この会の事業として、月一回の例会と機関誌を刊行したり、時折、地区内の史跡めぐりをすることにしている。会長森本裕氏は機関誌のなかで「最近十年ほど前から秦地区は発展として破壊の時代でありまして、これらの跡にも語り継ぐべきものがあると思います。こういうことを考え、或いは研究して、後を継ぐ人たちに譲っていききたいと考えるのであります」と述べている。なお、昭和五十九年七月に『秦史談』第六号を刊行しており、会の活動が順調におこなわれている。

高知市仁井田には「三里史談会」があり、会誌「大平山」を刊行している。この地区の人々はすでに三里小学校創立百年記念誌である「三里のことどもや」目でみる三里のことども」を刊行しているが、これは立派な地域史となっており、前者の本は高知県出版文化賞を受賞している。このような動きが発展して史談会が生まれたわけである。この地区の人々にとって大平山という山はシンボルの存在であったとみえ、会誌を「大平山」と名付けたのもその現れであると思われる。前面に風光明媚な浦戸湾と広大な太平洋をのぞみ、後方に緑の山なみが見えるという仁井田地区にあつては大平山の存在が、

その風景的なかなめになっていたといえよう。杉本重義氏は雑誌のなかで「大平山が三里を象徴するものとしてふさわしいということになりました。三里の景観や人々のくらしの様子は年と共に変貌しています。しかし、大平山だけは、昔ながらの姿をとどめています。ここでくりひろげられた少年の日々の思い出はかけがえのないものです。こうした世代をこえて共用できるもの、ふるさと三里への思いを『大平山』という誌名に託しています」と述べていることでもわかる。地区の人々にとってかけがえのないふるさと山である大平山が、これからも地域のシンボルとして生き続けることであろう。

昭和五十九年三月十一日に、上町一丁目から五丁目の、上街在住の有志二十八名が中心となって「旧家の会」が結成された。百年前後も続いていた旧家が六十五戸あるので、これらの旧家の結集をはかり、上街の歴史を掘りおこし、できれば上街の歴史をまとめたたいとしている。来年は坂本龍馬生誕百五十年にあたるので、この会の動向が大いに注目される。この機会に早く「坂本龍馬読本」を作成して、子どもたちに龍馬的精神のたくましさ教えるべきであろう。

（県立図書館郷土資料班長）

変わりゆく郷土の記録を

西岡 富久美

高知県写真家協会は、各自の所属するグループと主張を越えて、変貌する郷土の記録という大きなテーマに挑戦しています。写真の持つ記録性と芸術性の二つの機能のうち、主として前者に力点を置いて、正確で美しい作品を残すことを心掛けています。

協会が発足して十年になります。去る七月十七日から二十二日まで、中央公民館展示室で第十回写真展「土佐」を開催しました。多数の参観者からはげましくご教示をいただきました。写真展を開く毎に展示作品の写真集を作っていますが、面白いことにこの写真集



昭和47年4月



立川御殿
昭和59年2月

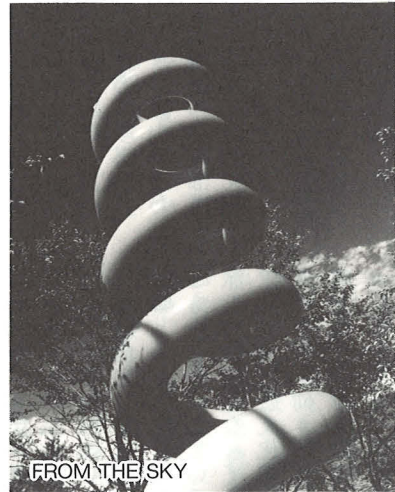
は古いものほど人気が高く、初号は今年発売しました。

カメラの性能が向上し、カメラを手にする人が増えた現在、その地でその人しか撮れない記録を幅広く集めてゆくために、今後はアマチュアの方から作品を公募することを考えています。撮影時の正確なデータを記入し、定点で写し続けることで誰でも素晴らしい映像記録が作れます。そして、写真を通じて会員との交流や連携をはかり、協力して郷土文化の向上に寄与してゆきたいと思えます。

(高知県写真家協会会長)

現代彫刻への試行

狩野 信児



野暮と粹の同居する私にとって、どういふものを指して現代彫刻とすればいいのか、今まで見当がつかないのも、朴訥で軟弱な作品が生まれる所以であると自覚している。しかし、画家や彫刻家に限らず、小説家も、詩人も、作曲家も、多作であることが作家としての必要条件である。瞑想しているだけで作品が生まれるわけではない。肉体と頭脳、あるいは心を微動させて初めて作品は排出される。昨年、美ヶ原高原美術館(長野県)に据え高知の方角に傾けた「TO THE SKY」が電波を発信し、そのエネルギーをキャッチすべく、筆山に「FROM THE SKY」を今年7月に設置した。筆山の作品は鋼鉄のパイプが螺旋状に立っているだけという単純な

形態なのだが、螺旋というフォルムの持つ、うねりの動感と、ダイナミックな鋭さを追求し、円周から中心に向かっての色彩の膨みは幾何学的な純粹抽象の世界に、私の熱い血の流れを感じるものである。しかし、骨格の凶太さと内容の豊さの追求が不足していると反省される。

完成度と極み、それに単純化とは抽象化と言い換えてもいいことだが、現代彫刻はこれらのこともまた、避けて通ることは出来ないのである。

(彫刻作家)

風伯 文は人なり

「文は人なり」という詞句は古くからの言葉だが現代でも依然生きている。作者の心の状態や常日頃の鍛練ぶりが如実に現われることは恐いほどである。これは他の芸術―美術なども同じことかもしれないが、美術は本来模倣しやすいものなので、ごまかしが効く面もある。しかし文章ばかりはどうも模倣が効かない。文章でごまかしをしようと思う時、頼晦やアイロニーという手もあるが、それでもやはり判る人には判ってしまう。

むしろ、大衆物語が書ける人の方がはるかに達人である場合も少なくない。ところで近頃では文章という道具をつかって出版業以外の商人にも奉仕するということが流行っている。も早二十年も昔のことだが、ある先輩がそうした商人の手に乗って一文を草した。友人たちが、何んでそんなことをするかといったら、先輩曰く「ゼニコ、ゼニコ、ゼニコのためだよ」と答えた。まあ、その言葉で皆は納得したが、そういうのを、志が低い、と昔はいった。しかしまだそこまではよかった。近頃は、あながちゼニコの為めでなくても、真面目な顔でそれをやる人が増えてきた。どうも妙な世の中になってきたものだ。

(旧人)

芸術文化

近頃とみに刀自ぬいてきたあたしなど、もはや若い人の世界など批評する資格はないと思っているわけだけれど、類冠りして好き放題言ってみよ、といわれれば、それはまたちよつぱり楽しみも湧くわよ。文化というものはいったい何なの。思うほどに考えるほどにわからなくなる。それは「文化」が手にとれるような物質でないからだわ、攫もうにもつかめないものだからだわ。だけれど、たとえば一枚の絵を描くということ。それを眺めていること。あるいは土をこねて一つの像を形どる。文章を書いたり、歌を作ったりする。自然のなから音楽を感じとり作曲をし、ピアノを弾くこと。人それぞれ

の得意芸を誰れにもわずらわされずにやってみる。つまり、楽しみのよね。それで人をも喜ばす。そうしたことみんなひっくるめて文化だ、といわれれば、あっそうなの、と納得がいく、さらにまた、その芸を組織化したり、ひろめたり、お金に替えてあげたりして手助けする。そういうことも文化だよといわれ、ば、これまた納得だ。けれど、いま云ったこともう一度考えてみると、みんな芸術文化のことよね、とすると、芸術って、しょせん遊びじゃあナイ、ナンダー。人もいうように、日本人は遊びこそをしないから、だから今またブンカンカと言わねばならないのよね。あたし決して、芸術を、茶化したりしてはいないわよ。だって遊ぶことは人いちばい好きなんだもの。

(小町)

新「土佐の国際感覚」

久保内 丸美

国境を越え、風土や歴史や文化を異にする人々と、短い人生のなかで出会いを求める。地球感覚に目覚めた交流と、郷土高知を見直すために、昨年三月に「えるびいサロン」は発足しました。

毎月一回のわりで、喫茶えるびいで日本人、外国人を問わずユニークな活動をしている人たちを講師に招いてお話を聴いています。聴く者は地元の人と高知に仕事や留学で来ている外国人、十〜二十名ぐらいます。言葉のハンディを越えて交流を深めるために通訳を置いています。志を同じくするかの参加をお待ちしています。

左の表は今までに招いた講師の一覧です。連絡先 えるびいサロン TEL 〇一八五 久保内まで



パンディさん(印)を囲んで

名前	国籍	職業等	テーマ
ビータ! ドックワイラー	スイス	学生	ヨットで大西洋横断(カリブの黒人島)
コンラッドザゴリ	アメリカ	プロモーター	日本人論
シドニ! バードウェル	アメリカ	医科大・英教官	カナデーでミシシッピ川を半年かけて下る
森本 房恵	日本	英教委 バンアメリカン スチューデント	世界の空を飛ぶ
長野 恭二	日本	英語教師 人生劇場主宰	インドを旅する
泉 順一	日本	プラサチザイン 事務所所長	21世紀の町づくり 高知の地場産業を生かす
ラム・ジャンカル パンディ	インド	科学者 アラバート太(海洋生物センタ) タイ留学生	カンジについて 生い立ちと非暴力運動 農村・文化
ジル・フランセ	カナダ	看護婦 森林警備員	単独中国旅行・自由に見 たまま、聞いたまま
佐野 正次	日本	西日本科学技術 研究所所長代理	中国を旅して
福地 惇	日本	高知大史学科 助教授	武士道について
ナタリア・デルトリオ	チリ	海洋生物センタ 留学生	チリの婦人生活と子供達
ステイブ・コニアリス	アメリカ	アラスカ水泳団 コーチ	アラスカチームにいつも 語ることは かものジョナサン

